

政治研究結果報告書

—政治研究助成—

一般財団法人 櫻田會
理事長 増田 勝彦 殿

西暦 2026 年（令和 8 年）2 月 1 日

研究者名 杉田 敦

大学名・職位 法政大学・教授

第 43 回（2024 年度）櫻田會政治研究助成による研究を下記のとおり実施しましたので、その結果について報告します。

※印の記入項目に関する貴會ホームページへの掲載についても同意いたします。

記

※研究の名称（英語も記入） Research Theme

政治権力概念の再定義 Redefining the Concept of Political Power

※英文抄録（研究目的、経過、成果 250words 以内） Abstract (Purpose, Process, Significance)

This study focuses on the political power, one of the key concepts of political studies. With Michel Foucault's introduction of the concept of "biopower," the notion of power was supposed to be redefined. The outbreak of infectious diseases, and the distinctly "biopolitical" responses to them, made clear the relevance of this concept. In reality, however, political science has not succeeded in achieving such a redefinition. This study therefore sought directions of redefining power by drawing of recent international scholarships. In connection with this, it also revisited and introduced the concept of politics developed by Bernard Crick, which differed from the conflict-centered view of the politics associated with Carl Schmitt.

※研究の目的・研究方法・意義（日本文 600 字以内）

政治権力概念は、政治学の基本概念の一つであるが、その理論的分析は必ずしも活発に行われてこなかった。権力と自由を対立的に考える自由主義的な権力観が、現実の権力現象を捉える上で必ずしも十分でないことは、フランスの哲学者ミシェル・フーコーらの著作によって明らかになったが、その後も権力論の展開は限定的である。

近年における感染症の流行と、それへの対策としてのさまざまな措置のあり方は、フーコー

が指摘する「生権力」の典型例を示すものであったが、政治学へのインパクトはほとんど見られない。

他方で、排外主義的なポピュリズムの流行と、それに依拠する独裁的な権力の横行は、権力集中の弊害を誰の目にも明らかにしている。

こうした状況下で、権力概念はどのように再定義されるべきか、他の学問分野との連携も含めて、さまざまな文献を精査し、理論的に考究する。

※研究経過と結果の概要 (以下の欄に 35 行以内(1500 字程度)にまとめる)

研究期間においては、フーコーの権力概念をめぐる近年の研究成果の分析が一つの柱となった。海外の研究動向を中心に調べたが、上記のような問題意識、すなわち感染症対策に見られるような「生権力」を視野に入れた研究は、意外にも少ないことが明らかになった。「生権力」的な権力技術は、実際には、AI の導入などと結びつきながら、中国に現れたよう、独裁的な権力を強化する方向で作用している。こうした事象を、従来の権力概念との関係でどのように位置付けるかは、いまだ十分に解明されていない。これまでの分析を踏まえて、今後も研究を継続して行きたい。

関連して、研究期間においては、もう一つの政治学の基本概念である「政治」に関しても分析を進めた。アリストテレス以来、政治は多様性の認識に基づいて、さまざまな利益や価値の調整を図るものと考えられた。しかし、とりわけ近年においては、多様性を欠いた同質的な「政治体」の間の闘争として政治を考える、カール・シュミット的な政治観が広く浸透している。こうした中で、20 世紀中葉からアリストテレス的な政治観の復興を強く唱えたバーナード・クリックの理論を改めて紹介する必要を感じ、その訳出を行った。訳出の過程では、クリックの他の著書なども参照し、彼の政治概念の本質を把握するように努めた。

この期間のもう一つの柱として、日本の政治学研究の中心であった丸山眞男の議論、とりわけ彼が追究した「正統と異端」をめぐる議論について、分析を進めた。丸山は、政治権力の正統性と、宗教的・理念的な正統性との分離が成立した上で、正統に対する異端という対立関係が明瞭に存在するような西欧キリスト教世界をモデルとして、こうした関係が成立しない日本社会の問題点を析出しようとした。こうした丸山の議論に対し、彼の正統性論が、参照しているマックス・ヴェーバー的な正統性論と必ずしも整合的でないこと、さらに、「初めに異端ありき」という彼の洞察が、そもそも異端とは正統によってそう名指されたものにすぎないという事情を無視したこと、などを主張した。

このように、いくつかの柱を立てる形で、政治権力概念と、関連する諸概念について、現時点での総括を行ったのが本研究の経緯である。

※研究成果の発表・著書、論文、学会報告等（あるいは発表の計画や形式等）

講演「丸山眞男の「正統と異端」研究について」(東京女子大学丸山眞男記念比較思想研究センター 2025年7月12日)

邦訳書 バーナード・クリック著、杉田敦訳 『政治の擁護』(岩波文庫 2026年3月刊)

以上